

イエスキリストの十字架のシーンは鮮明に描かれていません。イエスキリストがゴルゴダの丘に向かっていく下ローサの道、そして懺悔と言われるゴルゴダの丘に架けられたこと、二人の犯罪人が周りにいたことは書かれています。しかし、釘を打つことや辛かったこと等、具体的に描写されていません。聖書の中で触れているのはその周りの出来事です。周りにいた人達がイエスキリストをどの様に最小に見ていたか。それが最後どうなったかと言うことなのです。最初はあざけ笑い兵士たちはくじ引きをしてイエスキリストの下着を分けます。イエスキリストがまとっていたのは4つあったと言われています。頭を覆うもの、外套、履物、当時彼らが着ているものは4つだったので4つに分けられ旧約聖書の概念の中でイスラエルが分けられていくことを予言していて、当時その事も予言されていてその事の成就だったという事です。そのあとにイエスキリストが着ていた一枚の縫い目のない下着がでてきます。これはいったいどんな意味があるのか。しかし、聖書には一切出てきません。そして、多くの研究者がこの部分に触れますが、最終的には意味を見出す必要があるのかという所で終わります。一つ正しいことは当時大祭司が着る服が一枚の縫い目のない下着でした。旧約聖書の時代に縫い目がある下着をつけてはならなかったのです。その意味が一体何なのかということと考えながら、聖書にはこうだと書かれていますが私達が旧約聖書から新約聖書までを見ると何となくですが神様の御心が感じることができまます。この聖書箇所から自らの人生に当てはめたいと思えます。何故イエスキリストは生きていた間の前は「あなたの罪は許された」と言ったのに、ここでは「父よ許してください」と言ったのでしょうか。深く聖書を見てみるとやはり理由があるのです。其れは何故なのかとは書いてはいませんが神様から知恵をいただく必要があります。聖書の歴史の背景を学び様々な学者が研究したことから知識を学び何故イエスキリストはわざわざそんな方法で私達に残したのか考えなければなりません。背景からみても、そこでイエスキリストが「あなたの罪を許します」と言った場合パリサイ人や沢山のユダヤ人はイエスキリストを、あざけつて救しのメッセジにならなかつたのです。彼らは、イエスキリストはまだここまでおかれど神を冒涇する行動をとっていると言われて記録に残ったはずで、ところがイエスキリストは最後の最後で今まで言ってきたこととは全く違った方法で「父よ救してください」と言ったのです。救すという行為は自らの出来事に起きたことに対して救しましようという話を傷つけられた私達が一番救せないことは自分の大事なものや傷つけられること、それを感ぜるとしなな場所がよく分かります。なぜイエスキリストが祈るといふことを裁いてはいけなかったのか。私達はクリスチャンになると人を裁いてはいけません。良く分かっています。だから大儀というものが必ずでています。人を裁きたくない心理は相手をとった行動に対して相手が罰を受けていないことに対して救せないで罰したいのです。なぜイエスキリストがこの行為をしたのか。かという本とあなた自身に傷つけられたこと以上に私達が残した時です。クリスチャンは自然に救す事を生活の中で行うようになります。周りにいる人々の苦しみや悲しみを自分に抱いてそして自分の心の中にあって本当は隠しておきたい怒りを神様の前にぶつけていく。誰がそれをやったのかというパリサイ人だったのです。パリサイ人は自分たちの前に現れたイエスキリストが救せなかったわけで、自分たちが死刑に定めるわけにはいけないので、最初当時イスラエルをローマが支配していたのでピラトに渡し、ピラトはヘロデに渡し、ヘロデはユダヤ人の一人の王様だからローマの法律で裁けとピラトに戻し、ところがローマの法律では抵触しないのでまた戻して繰り返します。なぜこのような行為を繰り返すのでしょうか。彼らが訴えたのは絶えず自分達が腹たつたのではなくイエスキリストがやっている事が国民に対して悪なので私達が大事にしているものを傷つけるような罪を犯している悪い奴だと言って殺そうとします。今までの人生の中で皆さんが大事にしているものを傷つけられた痛みとクリスチャンになって神様を信じた人達が自らの問題を自らの問題としておくことができず周りの要因を持ってきて何かを訴え出る行為この二つの行為の為にイエスキリストは父なる神に祈るのです。なぜかと言うと傷つけられた人がその人の行為を許して下さいと願う行為は救しの確定だからです。普通はあなたと私だけの救しの出来事なのですがその上で神様が罰してくれるのを私達は待っています。しかし、イエスキリストはそれをしなかったのです。彼らを祈りて保証し救して下さいと言ったのです。自分が人を裁く行為は、自分が見えていないからです。だからイエスキリストは父よ彼らを救してくださいと言ったのです。罪を見ると言ったのです。目の前の行為をすべて見て感じて見ないようにするのはなく自分で受け取って屠場に連れていかれる羊のように黙って何も言わずに誰にも愚痴らずにイエス様を可哀そうだと思っ

た人が涙を流している姿をみて、私の為に泣かなくていいと言ったのです。イエス様の十字架の流れをもう一度思い起こしながら自分はどんな群衆なのかをみていただきたいのです。自分はあの中で人を救さず、人に指をさし、向き合わずに本当は愛したいのにそうではない方法をとっている行為がああ十字架のシーンに沢山でできます。自分の思い通りにならなかったことで沢山の儀をつくって人を裁いて落とそうとする。でも私達は人を裁く権利をもっていないのです。何故なら私達自身が罪人だからです。私達の内に刻まれないとイエスキリストのイースターの喜びは無意味です。イースターを喜んで祝つても人を裁いてイエス様の十字架の目の前でくじ引きをして卵を探してはいけません。イースターは喜びの朝です。あのマリヤ達がイエス様を追いかけて痛みを知り十字架の目の前まで命がけて従つていき、三日目に蘇ったことを知ったので喜んだのです。

① 記録しない

私達は記録していますが、見ないことにしています。これが我慢という行為です。決断が必要です。目の前で悪しき行為が行われた時あなたが傷ついた時忘れないようにしています。私達はその時の事を記憶しています。神様は忘れていて下さいますか。決して忘れていません。神様は言いました。私はあなたの赦された罪を二度と思い起こさないと言いました。それはイエスキリストが十字架で死んだからです。神様は忘れないようにしていますが意図的に記憶しないと言っています。礼儀に反する事をせず自分の利益を求めず怒らず人のした悪を思わず。この悪を思わないということが記録しないということです。家族は記録してはいけません。

② 後ろ指をささず

救しのプロセスには感情は伴ってないのです。イエスの皆によって救すと言明する事が大事です。祈りは賛美と一緒に。なぜ私達が言葉で言うか。祈りを自分が聞くとすることが必要だからです。耳から聞いて脳があなたの言葉を聞いて判断させる必要があるのです。祈る時は自分が意思をもって助けてくださいとはっきり自分に聞かせなければいけません。あの人の事を赦しますと言葉では祈っていますが心の中ではどうやって罰を与えてやろうかと思っています。だからこそ神様に祈る必要がありまます。我らに罪を犯したものを我らが赦す如く我らの罪をも赦したまえと祈る必要があります。神様に願うと同時に我らが赦す如く私は赦しましたと言明しています。私達はそれを宣言する必要があると言葉でいう必要がありまます。祈らないで多くの場合後ろ指を指してしまします。この行為をやめなければなりません。何か奇立つことがあるのであればそのことを通して神様はあなたに示したいのです。あなたと一緒にだ。奇立つことはあなた自身がとっている行為だといつも言われています。自分の行為が自らの中で大きくいけない事だと理解しています。だから人がその行為が嫌なのです。人によって腹が立つことは全部違うのであなたが腹立っているのなら自分がその行為をしていないかと探るよい機会です。指を指すということはその3倍自分に返ってくるわけ。神を呪い自らを呪うこととなります。ですから後ろ指を指す行為をやめなければなりません。

③ しゃべらない

しゃべることによってその人に制裁を与えたいのです。しゃべられた人の事は広がって終わることはありません。しゃべる行為は財産を盗むことです。話す必要がある場合もあります。それはあなたが真つすぐな道に戻る為の時です。しかし、私達の多くは同意してもらって話したいのです。わかってもらった時点で記憶されるのです。神様の前で私達が話してはいけません。自らが悪かったところを見つかけあうしか許すプロセスがないのです。しかし、多くの人は記憶し、指を指し、しゃべることによって自分は悪くなかったという所までもっていき初めて赦すのです。しかし、イエスキリストは違うと証明するためにわが父よ彼らを赦してくださいと願ったのです。彼らを罰しないでくださいと祈ったのです。神様にあなたの赦せなかった人を神様あの人を救してくださいと祈らなければいけません。

(要約者:富岡 美千男)

(2019年4月7日)